



を今か今かと待ちました。何度も家老の屋敷にたずねに行きました。が、いつかうによい返事がもらえません。

与右衛門 「ご家老様、殿様のお許しはまだいただけないのでしょ

うか。」

その後も、与右衛門さんが熱心に足を運んだので、「与右衛門さんを近江に帰したくない」と思っていた家老も、とうとうあきらめました。そこで、与右衛門さんに言いました。

家老 「中江殿、お殿様のところへあ

なたの手紙を持ってお願いに行くことにする。お母さんのために仕事をやめたいという辞職の願いを書いて、私のところに持ってきなさい。」

与右衛門 「ご家老様、ありがとうございます。さっそく書いてまいります。」

〈ついで、全部引く〉

与右衛門さんは、必死の願いを込めて家老に辞職の願いを書きました。一つは、自分が喘息にかかり、人並みの仕事ができなくて困っていること、また、一つは、ふるさとの母が年老いた体で、一人さびしく暮

らしていることを書きました。母が亡くなったら再び大洲に帰って、殿様にお任せしたいこと、そして、他の藩に移って立身出世したいという気持は決してないことなどを、真心込めて書きました。

⑩ 与右衛門さんが小川村に帰る決心をし、辞職のお許しを願い出てか



ら、早くも二年半の年月が過ぎました。しかし、とうとうお許しの返事はなく、ふるさとへ帰る見通しはたちません。

与右衛門 「ああ、殿様はいつお返事をくださるのだろうか。お母さんのことを考えると、本当に心配だ。」

年月がたつて、お母さんにもしものことがあつては大変です。

与右衛門 「よし、この上は、殿様のお許しが無くても、思い切つて小川村へ帰ろう。今は、この方法しかない。」

許しをもらわないで藩を出ることを「脱藩」といって、追っ手に討ち取られるか、とらえられて切腹を命じられるのが、その時代のきびしい決まりでした。しかし、与右衛門さん

は、小川村に帰ろうと心に決めたら、もう、何の迷いもありませんでした。

⑪ 与右衛門さんは、その年にお殿様からいただいたお米には一粒も手を付けず、全部倉の中に積んで堅く封をし（手を付けていけないことを示す方法）、そのまま殿様に返せるようにしました。

七助 「どんな様、どうしてそのよう

に封をして、倉から米を出せないようになさるのですか。」

与右衛門 「七助さん、お前さんだけには、ぜひ話したいと思つていた。これまで、何も言わずにいて、すまなかつたな。」



七助さんは祖父の時代から家の力仕事、水くみ、掃除、炊事など一手に引き受けて、誠実に働いてくれた男の使用人です。

与右衛門 「お前さんも知つているように、私には、近江の小川村に年老いた母が一人暮らしをしているので、数年前から殿様におひまをいただけるようお願いをしてきた。しかし、未だにお許しがいただけないのだ。この上は、脱藩しか方法がないと思ひ、近々実行す

ることにした。できるだけ、迷惑をかけないようにと考えて、準備をしているのだよ。」

七助 「どんな様は、前々から何か悩んでおられると思つていました。やはり、そうでしたか。よく分かりました。お手伝いできることから、私に何でも言いつけてください。」

⑫ 大洲の山々は、美しく色付き始めました。与右衛門さんは親しい人の見送りに断つて、門弟の一人だけに、港まで送ってもらいました。七助さんが、



「どうしてもお供がしたい」と言うので、やむを得ず小川村までついてきてもらうことになりました。

七助 「どんな様、こうして船から眺める大洲は、特別に美しいものですね。」

与右衛門 「本当だ。私も、『こんな良いところに、長い間住んでいたのだなあ。』と、しみじみ考えていたところだよ。」

そして、与右衛門さんは、「この美しい四国の山々を再び見ることはないかもしれない」と思うと、胸がいっぱいになりました。